

## 桐谷文雄先生の御逝去を悼む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鮫島, 輝彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025537">https://doi.org/10.14945/00025537</a>

## 桐谷文雄先生の御逝去を悼む

鮫 島 輝 彦\*

本会会長桐谷文雄先生は昭和57年12月18日急性心不全のため急逝されました。明治39年11月17日のお生まれで、享年76歳であられました。

先生は昭和39年10月、故望月勝海教授の後任として、電源開発株式会社より、静岡大学文理学部教授に來任されました。間もなく昭和40年4月文理学部改組により理学部が発足すると初代理学部長に推され、2期4年に亘り新学部建設の重責を果されました。理学部発足に当っては文部省と鋭意交渉されて前例のない地学履習コースの設置の承認を取りつけ、これは後の地球科学科設立の(昭和50年4月)萌芽となりました。時あたかも大学紛争の激甚期にあたり、24時間以上にわたる評議会団交などの酷しい経験もされたのであります。

昭和45年3月停年御退官後も、地質調査会社顧問、東海大学講師、静岡県温泉審議会委員、静岡県水資源会議委員、又本会会長として、亡くなられるまで地域社会の発展に寄与を続けられました。先生は東京帝国大学地質学科を昭和6年に御卒業になるとすぐ北樺太石油会社に入社され、昭和11年からソビエト連邦北樺太オハの油田開発事業に参加されました。昭和14年満州鉱業開発会社に移られ、満州(中国東北地区)で炭田等の調査に従事されているうち昭和20年敗戦となり会社は解散、帰国の途を断たれ、新京(長春)に残留の止むなきに到り、やがて中国政府留用(長春大学教授、地質調査所研究員)、昭和28年ようやく留用を解除されて帰国されました。この間、一児を栄養失調で失われるなど筆絶に尽くし難い苦労を重ねられました。

御帰国後電源開発会社に入社され、佐久間・御母衣など当時の新技術による巨大ダム建設の地質調査を担当せられ、これら新技術の定着に大いに貢献されました。

先生は温顔を微笑を絶やさず、悠容迫らざる毅然とした態度で人に接せられました。時に学生等が間違った事をした時など「君々。それは違ってやしないかい。」と穏やかだが断固としてケジメをはっきりさせられ、又自らに対しては実に厳しい人格者であられました。

本会創設の年である昭和39年に先生は静岡に御來任になり、以来常に当会の活動の中心にあって牽引役となって下さいました。昭和43年から45年、又昭和47年から57年と6期延べ12年間の長きにわたって本会会長を勤めて下さり、又「静岡地学」にもしばしば投稿を賜り、特に4・5・6号連載の「ダム建設とその地質調査について(その1・2・3)」又30号所載の「静岡県の水資源について」は御専門分野の有益な解説記事で、我々を啓蒙して下さいました。

先生は丁度5年前、長年連添われた奥様に先立たれ、大変気落ちされたにもかかわらず、その後も本会務をはじめ諸事に積極的に取組んで下さいました。学問としての地学の最近の発展は真に目覚ましいものがあり、地学教育や地域振興における地学の重要性もますます増加し、本会の使命も日々重きを加えつつある今、先生を失ったのは痛恨極まりないものがあります。しかし先生の蒔いて下さった種は芽を出し、静かに生長を続けて居り、先生からのバトンを引継いで、使命の達成に邁進して行く事と存じます。先生、いろいろと有難う御座居ました。どうぞ安らかにお休み下さい。

\*オークランド大(元静岡大学教授)